



うさぎロボ 著

一章 これはパンツ穿けないわねえ……仕方ない、お姉さんがひと肌脱いであげる

「いいから行けよ、助けてやるから！」

助けるわけがない、と真一はわかっていた。

うさぎ県のコンビニ。

まだ下の学校だろう少年三人が唯一の客だった。

真一は気弱さが服を着て歩いているような感じの少年で、実際には体操服を着ている。

他の二人も、同じく体操服だ。

真一たちは隣の県に住んでいる。

わざわざうさぎ県に越境してきたのは、うさぎ県の警察はみな女性だと聞いたからだ。

婦警なら甘いはず。

そういう、それこそ甘い考えを真一は持っていない。

しかし、いじめられっ子の彼は無理やり「友人」二人に誘われたら断れない。

隣の県のコンビニまで来て、押し付けられたのは万引きだった。

「空手習ってるから、婦警ぐらい来たって何とかしてやるよ。女なんか」

かなりどうしようもない発言。クソガキを絵にかいたような二人組。一人は金髪、一人は茶髪。

両親と同じ色に染めている。

真一は普通の黒髪。

それだけで家の雰囲気が変わりそう、という問題かもしれない。

「さっさと行けよ。あの薬みたいなのにしよう」

薬。

ナノ薬と呼ばれる、ナノメカが入った薬。一粒飲めば頭が半分吹っ飛んでいてもすぐ元通り。

うさぎ県の女性は怪我人が出た場合のために、九割以上はそれを常に携帯しているという。

真一たちには、あまり関係ない話だった。

ともかく、ハイテクな薬。しかし安い。

ラムネ菓子の類より安い位だ。

他県と比べ、このうさぎ県ではナノ薬の売り上げが目に見えて高いので、大量仕入れが可能になっており、他県より安い。

なぜ使用量が多いのか……ネットなどでは、一つの噂がある。

このうさぎ県はいわゆるドS女性の割合が世界一高く、彼女らが**男の特定部位**を破壊しては治し……を繰り返すために多くの薬を消費しているためだ、という噂が。

そういう噂を聞いていれば、少年らも不用意な女性蔑視発言は慎んだだろう。

彼らも男として当然特定部位をぶら下げているからには、そこを狙ってきそうな女性たちの多い県

でヘタなことは言わない。

が、知らないのでは仕方ない。

「女なんか、俺の空手でどうぞ」

「ぎゃはは、だよな、だよな！」

どうしようもない二人。

一番どうしようもないのは、本気で「婦警に捕まりそうになれば空手で倒して逃げるつもり」であるというところだろう。

二人合わせて普通の成人女性ぐらいの体重しかないのに、なぜそこまで思い上がれるのか。

まあそういう人間だから、他人に万引きを強要するのもかもしれない。

うつむきつつ、コンビニに入る真一。

女性店員が一人。

——何とか、見つからずにとれそうだ。嫌だけど……でもあいつら……

クラスに、いじめがある。

外にいる二人のように声の大きい者に逆らうと、真一のように気弱なものは今やられている者の代わりにいじめられるポジションに押し込まれかねない。

——僕が触ったものをみんなが「汚れた」とか言って、「汚れ」を擦り付け合うとか、そんなことされるのは絶対嫌だ……とるしかない。

バレたら、などとは考えられない。

いじめになどあえば最悪自殺に追い込まれかねないのだ。

死ぬよりは、物を盗ったほうがましと子供が判断しても誰も責められないだろう。

——とるぞ！

フラフラと、標的の菓の前を通り抜ける。

何度も行き来する。

外で初めは笑っていた二人も、徐々に苛立ってくる。

「あいつやらない気か？」

「ちょっと気合いを……あ」

ブルン。

それはまさに肉塊だった。

乳房というにはあまりにも大きすぎるそれ。

クソガキ二人の頭上を、爆乳が重爆のように通り過ぎる。よほど巨大な爆弾を積んでいるようで、今にも墜落しそうな振動ぶりである。

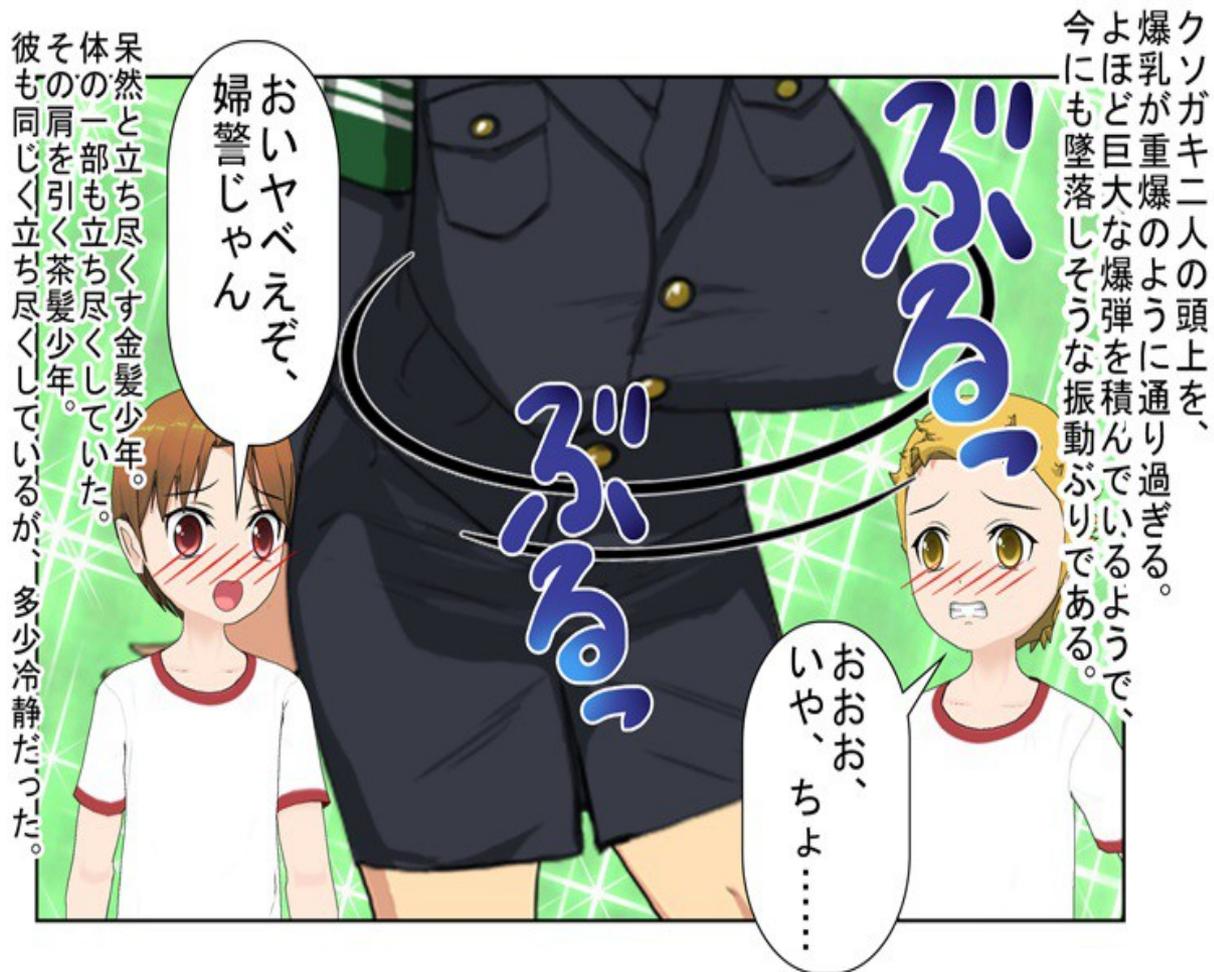
「おおお」

「おおお、いや、ちょ……」

呆然と立ち尽くす金髪少年。体の一部も立ち尽くしていた。

その肩を引く茶髪少年。彼も同じく立ち尽くしているが、多少冷静だった。

「おいヤベえぞ、婦警じゃん」



「あ、ほんとだ」

紺色のスーツに重爆を包み込んだ女。年齢は三〇少しか。

少年らから見れば三倍ぐらいは年を食っている。

——ババアじゃん。でも、このオッパイはバインバイン過ぎて……母ちゃんもデカイけど、デブってるし。デブってないのにこのオッパイは反則なわけで……細い……って程痩せてもないけど、ババアだし。ババアであることを考えればむしろ痩せてるか？

年の割にはすらりとしていて、爆乳の婦警。若いころはかなりの巨乳でスレンダーだったことがなんとなくわかる。

今でも、並の一〇歳下の女より絶対得点が高いだろう美熟女。

ニコリ、と少年らを見下ろす。

——見てる見てる、オッパイ見てるわ。やっぱりこんなちっさい子でも男の子ね。ぶら下げてるモノはぶら下げてるんでしょね、生意気に。もしかしてビンビーン、だったりして？ うふ、体操服だけど、ミニチ〇ポじゃわからないかもだから、今一つ判断できないわね。よく見れば、ちょっと突っ張ってる感じだけ……うふふ、年相応の小チ〇ポなのね。

コンビニに入る。

重爆ほどではないが肉付きがいいスカートの中身がゆさゆさと揺れる。

唾を飲みつつ、呆然と見送った二人。

「おい、どうする？」

「どうするって？」

「真一、引き上げさせないと。捕まったら俺たちの事チンコロするだろ！？」

「チンコロってナ○ワ金融道かよ！？ あいつだって馬鹿じゃねえ、婦警の近くでパクるわけねえ。俺らは先に引き上げるぞ」

別にまだ何もしてないのだから引き上げる必要はないが、後ろめたいのでその辺気づいていない二人。

まだ「悪いことをしている」自覚があるだけまじだろう。

何とかその自覚が強まることで、悪の道に進まずに済むようになることを祈るしかない。

腰を引きつつ、フラフラと歩いていく二人。

コンビニの中では、俯いた真一が残されていた。

——行くんだ、行くんだ。

集中するとほかのことが目に入らなくなるタイプのようだ。自動ドアが開き、店員がいらっしやいませと挨拶しているからには誰かが入ってきたのである。

一旦そちらを見て、客の動きを観察するべきだ。

が、そんなこと全く気付かず、何度目かの決意をして薬棚の前に出る。

いくつか種類のあるナノ薬の一つを手に取り、懐に入れる。

金弛緩剤入り、という知らない人間は意味不明のうたい文句の新商品だった。

怪しい動きに気づいていた婦警は頬を緩める。

——あらまあ、この子、通なのかしら？ 金弛緩剤って金ちゃんをゆるゆるにして握りやすくする薬じゃないの。何度も連続でタマタマ責めする時以外にこの薬はいらないわよ。それと再生薬のセットか……。こんな薬買ったら「絶対玉潰しに使う」といつてるのと同じだから、たぶんこの商品ははやらないと思うけど……。ともかく、万引きかしら。

それとなくついていく。

——気弱そうな子ね。外の二人に脅されてるんじゃない？ まあ見た目一発で判断した偏見だけど……っていうか、あいつら居ない……じゃあこの子がやってるだけ？ っていうか婦警がいるのにパクる？ 普通？ あんまりしゃきっとした子じゃないのかしらね。

重爆をゆすりつつ、思案する。

——私が前に回れば、たぶん薬を戻して出るでしょうけど……。万引き未遂として、騒ぎを大きくせずに済んでそれはそれでいいけど、でもまた別の所でやるだけじゃ同じかな？ よし、いいこと思いついたわ。

近づき、手を掴む。

「え、あ！」

厳しい顔を作る婦警。

——驚いてるわね、やっぱり婦警に気づかずやったのね。注意力散漫よ。

「オッパイ大きい……牛さんみたい」

「そっちに驚いてんの！？ っていうか牛みたいって珍しい表現じゃない？」

「あ、婦警さん！」

驚きつつも少年の腕を引っ張る。もちろん大人と子供で振り払うなど無理だ。

「見てたのよ坊や。薬、戻して。それでお話ししましょう」

「……はい」

おとなしく薬を出し、棚に戻す。

店員に目くばせして、真一を連れ出す婦警。

仕事熱心な婦警。

子供のことを考え、あえて万引きをやる前に抑え、しかし説教はする。

模範的、に見える。

事実そういう見方もできる。

しかし、完全にそうでもない。

——さーて、説教よ。そしてうふふ、上手い事理由つけてかわいいおチンピー見せてもらっちゃおう。いつも通り、ね。別にショタってわけじゃないけど、こういうかわいい子のチン〇ン見る機会は逃す女いないでしょ？ 見るだけよ見るだけ。ショタじゃないもん、見るだけ。しゃぶったり本番は無しよ、ショタじゃないもん。見たいだけ。これは健全。



誰も聞いていない言い訳を頭の中でしつつ、近くの公園に連れていく。

ひとけが無い公園。

生垣で囲まれ、外からは見えない。

最近では犯罪が起きやすいと敬遠される設計だが、古い物なのだった。さっさと改修するべきだろうが、予算がないのだろうか。

説教など人前でするものではないので、人目につかない場所のベンチまで歩く——という理由もあるが、やはり役得でいろいろ見る場所として人目につかない場所を選んでいるのだった。

歩くたびに血の気が失せていった真一をベンチに座らせ、前にしゃがむ婦警。

「何しようとしてたの」

「そ、その……あれは買おうと」

「ん」

「で、でも婦警さんに声かけられたから、やっぱりやめて棚に返ただけで……取って外に出るまで、万引きじゃないんですよね？ 知ってますよ」

頬を引きつらせながら、半端な顔で笑う。

眉を顰める婦警。

——頭はいいらしいわね。やっぱり追い詰められて、仕方なくやらされてたのかな？ こういう頭はいいけど要領が悪い子を守ってやって、適性がある学問の道に入れてやるのが教育でしょうに、先生は何してんの……って、まあ被害者扱いばかりもできないわよね。ここは心を鬼にして。

「婦警さんだからって、甘く見ちゃだめよ」

「そんなこと……」

「うふ、ここだけの話……婦警さんたちは悪い男の人を捕まえるためにね、特別なやり方を練習してるのよ。男の人を捕まえる用の、女専用の技……どういのかわかる？」

「え」

真っ青な真一。膝を締める。

金的をほのめかした婦警は目の端でそれをとらえ、内心ほくそ笑む。

「うふふ、そうよ。男の子だけの、大事な所……」

立ち上がり、爆乳を押し付け、耳に口を近づける。

「肉でできてるゴールドボール……お・キ・〇・タ・マ、狙うの」

「そ、嘘だ。だって潰れちゃったら……」

「大丈夫よ。さっき君が盗ろうとした薬、あれね、おキンキン再生用の薬よ」

そこまでピンポイントな目的で作られていないが、このうさぎ県ではそれ目的の薬同様に使われていることも確かだった。

立ち上がろうとする真一の肩を押さえる。

「さあ、正直に言うのよ。言わないというまでおキンキン……握っちゃうぞ？」

「ひいひい」

——うほおおお、かわえええ！ マジビビってる！ かわいいミニチ〇が縮んでんでしょね！ やだ、見たい！ 別にシヨタじゃないけど……親戚の男の子をトイレに連れて行くときは、おチ〇ポ君を喜んで摘まむ派だからね！ 見栄張って腰突き出すのがまたかわいいのよ！ 小さいのに男の子してるって……

膝を締める。女の部分が熱くなるを感じる。

べろっと長い舌で唇を舐める。

耳の近くである。

ビクと、とその音で体を強張らせる真一を見下ろしつつ、さらに甘い声で責める。

「嘘ついちゃだめよー、おキンキン大事でしょ？」

「ひ、ひいひい」

「おキンキン、おキンキン、男の大事なおキンキンー」

「や、やだああ」

膝を締めるが、ベンチに座ったまま動けない真一。

涎が垂れそうになるのを必死に抑える婦警。

——ちっきしょう！ かわいいじゃない！ いいわ、いいわ、これはうまいこと言って絶対おチンチ〇見ちゃうぞ！ 見るしかない！ そのまえに、もうちょっと脅かしちゃおう、かわいいから。

「正直に言いなさい、さもないと、たまたま、たまたま」

「あうううう」

ほとんど泣きそうな真一。体格差に加え、相手は特別な訓練をしているという婦警。

しかも、同じ攻撃をしようにも付いていない「女」でもある。

金的を狙ってこられたらお終いだ、怯えるしかない。

その怯え切った少年の耳元に、再び口を近づけて甘い息を吐きかける婦警。

「言わないと……お姉さんが、嘘つき坊やのおキ〇タマ潰しちゃうぞ」

玉潰し、という男にとっては強烈な恐怖を帯びるワードを口にする。

とどめのつもりだ。

が、急に真一は真顔になる。

「え、お姉さん？ 今、「お姉さん」って言った？」

びくうう、と体を強張らせる婦警。

しばらく黙る。

ちら、と真一を見るが、訂正はない。

本気で「お姉さん」と呼ぶには年が行っていると思っているのだ。

——うわ、何よこの子。確かに私、お姉さんというには年齢高いけどね？ 口に出す？ そういうこと？ これは許せませんわ……

ス、と真顔になる婦警。

「さー、キ〇タマ潰して君も今日から女の子よ。覚悟はいい？」

「え、ちょ」

急に爆乳を離し、耳の近くで話すのをやめ、顔を正面から見据える婦警に面食らう真一。

声色も、事務的な感じである。

「え、なにか」

「別に何もないよ？ お姉さんって年じゃないもんねえ婦警さんは。さあ、尋問ついでにキンキン潰し、男の急所を握り潰すわよ、大事な金の玉、二個とも握り潰すわよ」

ぎゅ、ぎゅ、と顔の前で何か握る手つきを見せる。

震え、目を見開く真一。

「ひいい、ちょ、ちょ……お、お姉さん、お姉さん待ってください！」

気弱だからとか、おっとりしているとか、引っ込み思案だとか、そんなことは睾丸を守るために動くべき時にはすべてどうでもよくなる話でしかなかった。

精一杯の笑顔を見せる真一に、婦警は冷めている。

——別に本気でキ〇タマ潰す気なんてさらさらないけど、もうちょっとビビらせてやるつもりはあるわ。ここでビビらせれば、「万引き＝去勢の恐怖」の構図ができて教育にもなるでしょうね。という大義名分もあることだし。別におばちゃん扱いに怒ってるわけじゃないよ？

「あら、無理しないでいいのよー？ おばちゃんですもんねー。……ババアですもんね！」

「無理なんてしてません、お姉さん妹ぐらいに見えるし」

「え、どういうこと？」

無理して作った事務的な顔を思わず素に戻す。

意味が分からなかった。彼女には妹もいないし、いても真一に面識があるわけがないのだから。

それに対して、真一は「かかった」とでも言いたげな喜色を浮かべて説明する。

「お姉さんが年齢より若く見えて、僕の妹ぐらいに見えるって……」

「見えるわけねーだろ！？ 三十過ぎで十歳以下のロリに見えるとかありえねえよ！？」

「ひっ！ すいません！ はうっ！」

ギュム、と股間を掴む。

「これはお仕置きが必要ねえ……お姉さん慣れてるのよ。キンキン握り潰しに。男の子のここには二つの部品が合って、棒と袋があって、握り潰すべきは下の袋の中身だから、下からこうして握っちゃえば手の中に……」

もぞもぞと、真一の股間を指で探る。

探りつつ、唾をのむ。

手の中の肉塊、始めこそどこに玉があるか探るが、すぐに気づく。

手の中全体に、すでに玉が広がっていると。

加えて、別のものも零れ落ちんばかりだという事に。

——お、ちょ、ま……これ……ボリューム……ウソ……手からあふれる……

ゴクリ、と唾をのむ。飲みつつ、声を多少裏返らせる。

「あ、あの……君、ここ、大きいですね？」

片言、敬語、妙な話し方だが、驚きすぎて気づかない。

真一も、顔を赤らめつつ驚く。

「あ！ だ、黙っててください！ きっと、笑われるから誰にも……」

「秘密にしますけど……でも、連れション……おしっこ並んでして、お互いの、見ないんですか？」

もみもみもみ、股間の雄肉を揉み上げる婦警。

顔は徐々に赤らみ、真っ赤だ。

——うおおおお、なにこれ……大蛇、大蛇がのたうってる。こんな子供用のパンツに入るわけない……え、こっちの、鶏の卵みたいのが……キンキン？ うひゃああ、すごい、大きい！ デカ金……えげつな……えげつなあ……なんてもんぶら下げてんよ……こんな気弱ないじめられっ子が、股間だけは大人……大人以上よ。大人でもこれよりデカイ奴は少数派だもんね。

揉みつつ、チラッと周りを見る。

犯罪が起きやすい、外部の死角が多い公園の、さらに人気のない場所のベンチ。

もともと、役得のために選んだ場所である。何をしようが問題はない——いや、問題だろうが、見つかりにくい。

目を泳がせつつ、真一をちらりと見る。

「いやあ、君……名前は？」

「谷本真一……」

「真一くん……ここ、何か隠してるんじゃない？」

揉みつつ、多少冷静さを取り戻してくる婦警。

「え、そんな」

股間を揉み解され、赤くなっていた顔がさらに真っ赤になる。

「隠してません！」

「そう？ それじゃちょっと婦警さんに見せてくれるわね？」

この流れ。

今まで、こういう補導系の行動をとった時、大体常に婦警はそういうことをしていた。

——問題になってないから、問題じゃないのよ。うまいこと男の子のを喜ばせながら見て、アフターケアも完璧だから、問題ないという理屈。**男女が逆ならキ〇タマ潰し**だけど、女が見るならセーフ、それが世界の現実ってやつよ。

考えつつ、いつも通り型にはめに行く。

「隠してないなら、いいよね？」

「な、なんで……隠してないです！」

「男の子なら平気でしょ？ 見せるぐらい。君の年にしたら、ここ大きすぎるから……何か隠してるんじゃないかって、婦警さんは別に思わないんだけど」

「え？ 思わないの？」

「でも、決まりなの。こういう場合、調べなさいって」

——デ〇チンショタはチ〇コを見ろ、なんて決まり無いわよ。でもこういえば……

「婦警さんも辛いよ。でもね、男の子なんだから大丈夫でしょ。女の子なら恥ずかしいだろうけど……ついてるものついてるだけなら、なにも恥ずかしいことはないのよ？」

「ううう」

少し離れる婦警。

「さあ、下ろして。男らしく」

「目、瞑っててください」

「仕方ないわね」

目をつぶる。

振りをする。

不測の事態に備えるためでもあるが、見たいというのが大きい。

うっすらと見つつ、手でズボンを下ろすようなジェスチャーを見せる。

「さ、これでいいでしょ。女の子みたいに恥ずかしがらないで、さあ、男の子！」

薄目で見られていると知らずに、顔を真っ赤にしながら、大人の女の前でズボンを下し始める真一。

——お、脱ぐわね。ズボンに手を。お！ 一気にパンツも、男らし……おおお！ 男らしい！ た、遅しい……すごいのぶら下げてるわ、さすが日本男児ねえ……ぶっとい、根元、付け根の太さからして違うわ、膨らんだらアレに見合う太さに？ っていうか、おキンキン！ 重そう！ おチ〇ポも重そうだけど、キンキンは根元紐でしょ？ 切れちゃわない？ 重さで**セルフ去勢**かまさない？ いや、袋でも支えられるのか……でも、ほんとに、ひよろひよろの体に玉も竿もごつすぎるわ！

「目、開けていい？」

「は、はい」

「それじゃ……まあ！ 立派ねえ！」

「え」

これ見よがしい目を見張り、口を押える婦警。

「こんな大きい人、見たことないわ……学校じゃ絶対一番上でしょ？」

上。

大きい、という表現はしなかった。

大きいのがいい、という価値観があるかわからないからだ。

しかし「上」は上である。

「おチン○ンじゃナンバーワンでしょ、真一くん。それ、男の子として一番ってことよ。すごいわねえ、ナンバーワンの男！ トップチ○ポ！」

「そ、そんな」

耳まで真っ赤になる。

羞恥と、誇らしさ。

男として一番と、大人の女、身内でもない重爆熟女に太鼓判を押されたのだ、巨大すぎる男の部分から暖かい物が全身に広がる感覚を覚える真一。

——うわ、うわ、恥ずかしい、そんな……僕が男として、学校で……チン○ンが一番大きいから……確かにみんなの、クラスの全部の合わせても僕の一本分にならないぐらい大きさ違うけど……でも、ああ、なんだろう、うれしい……嬉しすぎる……

喜ぶ真一の姿に、内心にんまりする婦警。

——よしよし、いい感じ。チン○ン褒めれば丸く収まるのが男女関係よね、やっぱり。実際にでっかいこの子みたいなのなら褒めるのも楽だけど、年相応のミニチ○ポでも当然褒めまくるわよ。チン○ン褒め上げていい気分させていい思い出にしちゃえば、黙っててもらうのも簡単で、問題化しないもんね。

今までこの調子でやってきた。

散々金責めで脅した真一がもうまんざらでもないというか、相当嬉しそうな顔をしているのを見て自信を強める婦警。

さらに、だめ押しを始める。

「婦警さんが子供の時にも真一くんぐらいチン○ン大きい子いたんだけどね、すっごくかっこよかったのよ？ 君ぐらいの時はパツとしない感じだったけど、何年か後にはチン○ンに見合うぐらい背も高くなって、顔もカッコよく女の子にモテモテで……タマタマも大きくて男らしかったから、喧嘩も強くなってね……下の学校のころはチン○ン以外普通だったんだけど、上に上がるころにはすっごくねえ、チン○ン相応に……強くてカッコよくなって、ほんとみんな憧れたのよ。こんなおっきいチン○ンに」

もちろん嘘八百。

ブラブラと、小柄な体を内側から破って垂れ下がるアナコンダをかるく握り、手を上下にさする。

顔を赤らめ、黙ってうつむく真一。

「うふふ、真一くんのと同じ、立派なチン○ンの持ち主だったのよ、その子。選ばれた男、勇者のチン○ンの持ち主……」

巧妙な持ち上げだった。

真一がかっこよくなるといっているわけではない。

だが「同じような人間」がそうなったといっている。これと同じだとしつこく言いつつ、アナコンダをさすりながら。

——君がかっこよくなる、って話じゃ根拠もないし見え透いたお世辞だけど、これは「人の話」だし……でも、同じ特徴の人がそうだったって話よ。自分と無関係と思う人はいないわよねえ……ほぼほぼ自分の事と思っちゃうよね、でも人のことだから謙遜も否定もいない、ただ嘯み締められる……うふふ、うれしそう。うれしそう。あ、来たわ……女に褒められ、チン○ンを触られた男の自然な……おおおっ。

想像はしていた。

アナコンダが戦闘態勢に入れば、驚くべき変化があることは。

十分以上に予想し、驚くはずがない精神状態で待ち受けていた。

しかしまさかそもそも巨大な重砲のようなアナコンダが大和の主砲のごとき昇り龍になるとまでは流石に想像していなかった。

呆然とし、目を剥き、ついで……むしろ軽く怒り出す。



「やだ、なんなのこれ、なんなのこれ……こんなのおかしくない？ いや、もちろん私の男性遍歴並みじゃないから結構これ以上の人もいたよ？ でもこの子、年からしてこれは完成され過ぎでしょ……完全に銃刀法違反じゃない……」

怒りというより困惑だろうか。

勃起した自分のモノを見て、顔を真っ赤にして困惑する女を目の前に、慌てふためく真一。

「ち、違うんです婦警さん、これは勝手に……」

「あ、大丈夫よ。男の子なら、普通だよ？ でも、このままじゃパンツも穿けないよね」

——元からどうやって穿いてんのってレベルだけど。

周りに目をやりつつ、上着を脱ぐ。

青いシャツも思い切って脱ぎ捨てる。そのほうがいいだろう、ぱっと見婦警が巨マラを突き上げたショタの前に立つ姿は危険極まりない。

スカートだけなら、遠目にはただの重爆級の爆乳を搭載した一人の熟女でしかない。

「うわ、お、おっばいいい」

「うふふ、そうよ。……さっき外にいた二人の子、知り合い？」

「あ……」

「うふふ、あの子たち、私が通り過ぎる時オッパイ揺れるの見てね、チン○ンびよこっとしてたわ。君のとは全然違う、超小さなおチンチ○を」

言われて、水泳の着替えの時などに見た二人のモノを思い出す真一。

どうあがいても自分の十分の一の体積もない、二人合わせてもないだろう一物。

そちらが普通で、自分のがおかしいと思っていた。

しかし今やその価値観は逆転していた。

いや逆転というか、劣等感が逆に強烈な優越感に変わっていた。

「君が優しくしてあげてるから強いみたいな顔してるかもしれないけど……。ズーっと、下よ、男として。おチン○ン見ればわかっちゃう。おキ○タマの大きさで、どっちが雄かわかるのよ、女にはね」

「お、お姉さん……」

「うふふ、お姉さんよ」

両手を頭の後ろに、背をそらす婦警。

突き出され、重爆が威容を示す。ギン、と大和がさらに巨大化する。

婦警にとびかかる、という事もない。

何をしていいかわからない。

重爆を左右に展開させる婦警。隙間になすすべもなく挟み込まれる大和。しかし。

「うわ、ウツソ……先っぽ出てる。十人に一人出るかどうかだっただけなのに……」

驚いたのは、婦警のほうだった。

「あ、うわ……」

真一のほうは、驚愕どころではない。

——うわ、ひんやり……でもちょうどいい位温かい、ああ、チン○ンがびくびくしてるから、優しく抑え込まれて、自分でそのビクビクがわかる。タマタマまで柔らかいおっばいが押し付けられてくる。ちょっと汗っぽくて、チン○ンに伝わる肌の感触が……

仰け反り、白目を剥きそうになる。

ベンチに座ったままなので、倒れはしない。

ベンチに抑え込むように、膝をつき、重爆を押し込んで逃げ場を奪い、爆撃体勢に入る。

「これ、パイズリっていう女の必殺技なのよ。みんな、男の人は大喜びよ」

「うわああ、パイズリ、パイズリ……オッパイがあああ」

「動くよ？ すぐ出しちゃだめだよ？」

このままじゃパンツが穿けない云々という大義名分を掲げていたことなど忘れて、素のセリフを吐く。

左右の重爆の間から顔を余裕で出した巨砲の砲口に舌をベローリと這わせる婦警の恍惚とした顔を見下ろす真一。

「ああ、チン○ン舐めて……そんなとこ汚い……」

「べろべろしちゃうわよ」

舐めつつ、涎を大量に流してパイズリの潤滑油にする。

徐々に、上下に動かし始める。

「重くて大変なのよねえ。普通の人何倍もあるから。あは、君の大チ○ポと同じ」

「すごいオッパイ……やっぱりオッパイは大き方がいいですよ。外国の女優さんみたいで……」

「うふふ、ありがとう。チン○ンも大きいほうがいいよね、**富士山みたいよ**」

ぶっちぎれた例えを口にしつつ、タブタブと重爆を揺らす。

上下に持ち上げ、富士山の頭を抜くかのように絞り上げる。

重爆にビクビクする巨砲の熱が伝わる。さらにその熱を巨砲で感じ取りつつ、真一が目をつぶる。

「あ、あっ、チン○ン、チン○ンが……」

「あつい、あついよ真一君のおチンチ○。大きくてパイズリしやすいよ」

ちゅぷちゅぷ、富士山と重爆がこすれ合い、富士山から染み出した雄汁が徐々に淫猥な音を奏で始める。ゆっくり上下するだけだった重爆も、慣れてきたとみると動きを複雑に変え始める。

左右からギュッと押し潰して絞り上げたり、シュッシュッシュッと音を立てて素早く擦ったり、逆にゆっくり擦ったり、乳房が大きいほどパイズリがうまくなる法則そのままの巧みなパイズリ。

鼻を鳴らす。若い、それだけに強烈な雄の臭いが鼻孔をくすぐる。

——やばい、なにこの臭い……くさい、くさいのに、マ○コが……うずいちゃうよ……女の本能ゴリゴリ刺激してくる……

「そらそらそら、チン○ンいい？ チン○ンいい？」

「いいですううう、オッパイ最高ですうううう」

「本当はこんなことしちゃだめだけど、みんなには内緒にしておいてあげるからね」

「あ、ありがとうございますううううおおおおお」

「万引きの上に、婦警さんにこんなことしてもらったんじゃ、かなり問題からね。ほらほら、チン○ンべろべろよー」

「ひいいいいいい、舐めないでええええ！」

パイズリで頭をバカにした状態で都合がいい考えを流し込む田丸に、なすすべなく悶える真一。

「だめー、舐めるわよー。男なんて喧嘩になればタマタマ狙いで一発、エッチになればチン○ン狙いで一発の女の子には勝てない生き物なんだからねー」

「ひいいいい、女の子強いいいい」

「ちゅっちゅっちゅ、立派なチン○ンチュッチュッチュ、んー、私の涎や汗の臭いに男の臭いが混じってあげつないわああ、マ○コうずくううう」

強烈なパイズリに腰を抜かすように、後ろに下がる真一だがベンチの背に当たるだけ。

そこに抑え込むように押し込んでパイズリ、左右から重爆で抑え込みながらとどめのフェラ。

巨大な先っぽをそれでも口の中にあっさり取り込み、舌をローリングさせる。

——そらそら、トルネード。おマンマンも知らないピュアチ○ポにお姉さんのトルネードフェラはきついでしょ。うふふ、先っぽだけでも小さい人の根元までよりボリュームあるわ。

「はひいいい！ やだ、出ちゃう！ 何か出る！ 放して！ チン○ンんんん！」

出始めると、舌でカバーして喉に入っこないようにしつつ唇を絞り、刺激し続ける。

——ほらほら出しちゃえ。キ○タマの中身全部出しちゃえ！ 初フェラにふさわしい大量射精し
ちゃいなさい！ 私の口孕ませるぐらいに！

「お、お姉さんん！ おごおおお！ ひいいい！ なにこれ、なにこれ、き、キ○タマ溶ける
うう！ 溶けて出る、チ○コから出る、キ○タマ無くなっちゃうよおおお！」

ゾクゾクと背中に味わったことがない感触が広がっていく。

何かが来る、と予感せざるを得ない。

——ひいいい、おかしい、おかしい、チ○コおかしい！ こ、壊れる？ チ○コ壊れる？ 女の比とp
に食べられる？ 逃げないと……でも、気持ち良すぎて……ああ、だめだっ、チ○コが、破裂する、
破裂するっ……

一瞬、世界の色が変わったように感じられた。

全身が溶け、一物から噴き出すような異様な感覚に襲われる。

熟女の口の中に何か一物から出す。一物から出すものといえば尿以外知らないうぶな真一。

しかし、尿が出たとは感じなかった。

全く別の、不可思議な何かが出たとしか感じられない。

「あうおおおっ」

いや、仮に尿が出ていても、身動き取れないほどの快感に襲われ、もはやただ一物から何かを噴き
出すだけの生き物として、その生まれて初めての感覚に酔いしれているしかなかった。

「で、でるううう」

「ん、んぶっ！」

ドクンドクンドクン、シャワーのように放出される粘液に、ある程度は巨玉から予想していた婦警
も面食らう。

食らいつつも、熟女の意地で受け続ける、息もできず、受け続ける。

熟女の維持として、ショタっ子の射精などに後ろは見せられない。

それでも気を失うかと思ったとき、やっと放出が止まったのに気づく。

ジュポン、と粘り気のある音。

口を放す、ぼたぼたと、閉じる前に粘液が垂れる。

慌てて手で押さえる。

——うおっ！ どんだけ出してんのよ！？ マジで金ちゃん溶けて出たんじゃね？ ため込んでた
のねえ。オナニーも知らないんでしょうね。うわ、ゼリーみたい、飲めるかなあ。っつか、苦っ！

この粘度でこの味って、もう**毒汁じゃん**……ここまで濃いともう別の液体ね。

見下ろす。

下半身丸出しの真一が、ベンチにぐったりと沈み込むように座っている。

大和はまだ沈まず。ギンギンに天を突いている。

——さすがデカキ○タマ……

思いつつ、飲む。

ごくん、ごくん。

真一は見てもいないが、これも熟女の意地で飲む。

意地プラス、精液は肌にいいという話が頭に浮かんでいた。

——いや、そんなに信憑性があるとは思っていないけどね？ でもこれだけ濃いなら多少は……ていうか、ちょ……喉……

「うっ、おげっ」

あまりの量と粘度に吐きかける。が、何とか抑える。

——初フェラの結果ゲロられるんじゃこの子がかawaiiそうだし……それ以前に、エッチの先輩である「お姉さん」として、そんな醜態は見せられないわ。あくまでも余裕をもって。

「うふふ、すごかったよ。元気ね……あ、今もか」

「お、お姉さん……た、タマタマ無くなった……」

ぐったりと、溶けたようにベンチに沈み込みながら半ボケ顔で見上げる真一。

にんまり笑う婦警。

「うふふ、大丈夫よ。ほら」

「はふっ！」

しゃがみ、握ってやるとびくりと震える。顔の前で大和が揺れる。

ごくんと唾を飲んで口直ししつつ、一瞬目を点にする。

が、すぐ気を取り直す。

にぎにぎと、男の命の源を高級な筆の先のような繊細な女の指が刺激する。

「ほらほらー、おキ○タマは健在よー」

「はふううう！ わ、わかりましたー！」

「っていうか……」

——この子、握られたらチン○ンがビクビク……マゾくんなの？ この年でそれは業が深いわね…

思いつつ、気づく。

スカートの下。

女の部分がじっとりと濡れ、温かくなっていることに。

パイザリの興奮で赤らむ頬を撫でる。

——やだ……こんな子供相手に……ダメよ。これまでも、さすがに本番はしたことないわ。それだけは、さすがに一線引いてる。常識ある大人だもんね。

子供の睾丸を握り、ビンビンの巨棒を目の前にしたオッパイ丸出しの常識人。

体験場の終わり

この後ショタと熟女と本番、上司の熟女に見つかるも、彼女とも本番で丸く収まる。

さらに署長の熟女とも本番で、丸く収める。すべてを収めるショタ巨根。

続きは製品版でお楽しみください。